

トリニティー・サンデー（三位一体の主日）説教

一つの教区、一つの教会、一つの礼拝

2020年6月7日

グレゴリー・H・リッケル主教

今日はトリニティー・サンデー（三位一体の主日）です。神が一なるお方にして三者であるという、神秘的でありながら、一部の人々にはむしろ混乱を招くようなこの三位一体という考えに焦点を当てる日です。言うまでもなく、現在私たちの周囲では多くのことが起こっており、私たちは二つのパンデミックに直面しています。一つ目はウイルスであり、それは目には見

えませんが、致命的です。これは私たちの多くの中に乗り込んできて、そこに住みつき、他の人へと広まっていきます。私たちに乗り込まない限りはウイルスにはまったく危険性はないのです。私たちはベクター（媒介者）と呼ばれ、ウイルスを持ち運び、無意識のうちに他の人と共有してしまうのです。二つ目のパンデミックは人種差別であり、これもウイルスです。それは私たちの多くの中に乗り込んできて、そこに住みつき、他の人へと広まっていきます。私たちはこの人種差別のベクターでもあり、それを持ち運び、無意識のうちに他の人と共有してしまいます。どちらのパンデミックの場合でも、ウイルスを繁殖させ、増殖させる要因とそれに対する治療法はまったく同じです。否認す

ることはどちらをも野火のように広めてしまいます。そして、どちらの場合でも最大の治療法は、自分自身と他の人への愛です。このすべてからみて、三位一体という神学的教義はたいして重要ではないように見えるかもしれません。しかし、今日私は、そうではないことをお見せしたいと思います。

この主日をトリニティー・サンデーに選んだ理由の一つは、あらゆる方法を駆使して私たちのつながりを保つために膨大で感動的な努力をしてこられた聖職者と信徒の皆さん全員に、一日の休日をとっていただくためです。もう一つは、まもなく対面での礼拝に戻れることを願いながら、遅くならないうちにそれをやりたかつ

たのです。そして最後に、トリニティー・サンデーは、あらゆる場所の説教者への贈り物として選ばれました。というのは、これは一部の説教者にとっては最も恐ろしい主日だからです。私はかつて頻繁に、学長としてゲスト説教者をこの主日に招待しましたが、その人には日付だけを教え、あらゆる手はずを整えた上で、説教者自身がその過程でそのことに気付けるようにしました。

今日は、私の番であり、特に多くの優れた説教者の方が参加しておられて、これについてほとんどの方は私よりもはるかにうまく説教されるので、いっそうドキドキしています。しかも私

たちの日常生活に共通して起こっているできごとにより、さらに気が滅入ります。

三位一体は、キリスト教を真に際立たせるものです。実際のところ、それは他の信仰を持つ人々がキリスト教に対しいささか疑わしく思うようにさせてしまう教義の一つになっています。アブラハムに発する他の主要な信仰的伝統と同様、私たちは神を一人のお方と見ますが、一人のお方の中に三者が存在するというこの三位一体という概念をそこに追加しています。

この日に説教する上での致命的な落とし穴の一つは、三位一体を説明しようと試みることです。私はずいぶん前にそれをあきらめました。

今では、それを完全に説明できなくても、ただ信じるのがほとんど苦にならなくなりました。それは私がただ年をとったからだとか、ただ怠惰になったからだと言う人もいるでしょう。いつものように、それは皆さんご自身の判断にお任せします。

ただ、私が言いたいのは、この教義は私にとっては非常にスッキリした内容であり、とくに今のような時代を生きていく上で、慰めさえも与えてくれるということです。

三位一体は、現代の文化にも確かに入り込んでいます。今日一緒に礼拝している多くの皆さん

は、ドン・マクレーンのアメリカンパイの歌詞の次のようなくだりをご存じでしょう。

「そして最も尊敬する三人の男たち、父と子と聖霊、彼らは海岸行きの終電に乗った、音楽が死んだその日に」

私はこの歌が大好きで、この一節がいつもお気に入りでした。ただ私はこれが全部男たちであるとは思いませんし、彼の三位一体についての考えも神学的には通用しないと言っておく必要があります。しかし私はとにかく彼の考えの流れが好きです、つまり、三位一体、お一人の神がそれ自体の中で関係しているという考え、そしてその神は世界にも関係しており、実は世界

の中において、そこで起こっていることに関心を持っているという考えです。その部分に関しては私は真実であり、良いことだと思えます。

実は、三位一体という考えに、今は、かつてないほどワクワクしているのです。私たちの神とは、神ご自身の中にある関係性そのものであるという考えが好きです。

複数の人格を持った神という説明をする人もあり、それはしばしば悪いものと見られますが、ある意味ではそれは私たち誰の中にもあるものです。誰の中にも、表面上の自己とともに、ごく少数の人々とだけ共有する内面的な自己、そして自分でも知らない盲目的な自己があります。

私のお気に入りの神学者の一人であるミロスラフ・ヴォルフはこう言っています。「キリスト教の神は孤独な神ではなく、三つの人格の交わりなので、その信仰は人々を神聖な交わりへと導きます。しかし、キリスト教の神は私的な神ではないため、三位一体の神との閉鎖的な「四人組」の交わりを持つことはできません。この神との交わりは同時に、同じ神への信仰に身を委ねた他の人々との交わりでもあります。したがって、全く同一の信仰的行為により、人は神との、またその神と交わる他のすべての人との新しい関係に身を置くようになるのです」

—ミロスラフ・ヴォルフ、われわれにかたどって：三位一体のイメージとしての教会

この交わりとは、私たちの、神との、そしてお互いとの関係です。交わりとは、他の人が生きることができるように、自分たちが互いに距離を置くことです。交わりとは、私たちが集まって、正義のために自分の最善を尽くして行進し、祈り、抗議することです。交わりとは、私たちが解決策の一部となれるように、自分自身を変えようとすることです。交わりとは、物理的には一人であろうと誰かと一緒であろうと、すべての人のために世界をより良くすることを目的として私たちが行うすべてのことです。

私たちの神は神ご自身に対しての関係であり、私たち全員をそこに含めることによって完結す

るという考えが、私はとても気に入っています。

少し異なる三位一体ですが、この一週間の中で私の心に焼き付けられた場面での三位一体についてお話ししたいと思います。

言うまでもなく一つめの場面として、ホワイトハウスの向かいにある聖ヨハネ聖公会の教会の前で、私たちの大統領が聖書を掲げている場면을挙げる必要があるでしょう。二つ目は、看護師とファースト・レスポonderたちが、一方のパンデミックである COVID-19 との戦いの渦中から外に出てきて、はるかに長期にわたり私たちの間で猛威を振るっているもう一つのパン

デミックからの正義と癒しを求める平和デモの
行進者たちに声援を送り、感謝している場面、
そして最後は、アフリカ系アメリカ人の小さな
女の子が、夕暮れ時に、国内のどこかの都市で
のデモ行進の最中と思われませんが、「次は私の
番？」と書かれた自分の体よりも大きなサイン
を頭上に掲げている場面です。

これら三つのとても異なった場面が、今週は本
当に心に引っかけたのです。これらは対照的
な場面です。この国での自分の生得権であるべ
き平等に対する不公平に気づき始めた無力な子
供と、この国の指導者であり、その子や私たち
全員のために、人の持てるすべての力を備えた
大統領、つまり公共の広場を一掃して、願い通

りの写真を撮らせても余力を持った大統領との対比です。そして、より希望的なもう一つの対照は、二つの異なったパンデミックの最前線に立つ労働者、英雄たちです。一つは新しく壊滅的なパンデミック、もう一つはこの国の建国以来続いています、前者同様に壊滅的なパンデミックです。

これらのすべての場面の真ただ中のどこかに真実があり、正道があります。そして、それぞれの場面には私たちへのメッセージがあります。大統領の月曜日の聖ヨハネ教会への散歩を良いことと考えるか、茶番劇と考えるかはさておき、そこにある私たち全員へのメッセージは、聖書を携行したり、聖書を手に持つだけで

は不十分であり、それを開き、読み、マークを付け、含まれているメッセージをよく心でかみ砕いて、実践しなければならないということです。私は時々、あなたは聖書を信じているのかと聞かれることがあります。いつも「いいえ」と答えます。ただし私は、聖書には私たちが神と交わるために必要なすべてが提供されていることを信じています。そして私はその神と、聖書が指し示すすべての真理を信じています。あの小さな女の子の写真では、彼女の質問は私たちの社会に向けられたものではなく、警察官だけに向けられたものでも、大統領だけに向けられたものでもありません。その質問はまさに皆さんと私に直接向けられています。その質問の奥にある助けを求める叫びも私たち一人

一人に向けられているのです。医療従事者とデモ参加者がお互いに拍手を送る場面からは、私たちが実現できる姿、実現すべき姿、私たち自身のより良い姿を垣間見ることができます。

最近、私たちが今は聖餐の交わりを持っていないという声が聞こえてきます。しかし、私はそうは思いません。たしかに今はパンと葡萄酒による交わりはしていませんが、交わりそのものは今も健在であって終わりはなく、今後も決して終わることはないでしょう。最近、私たちの教会が閉鎖されたという声が聞こえてきます。しかし、これも決して事実ではありません。教会の建物は閉鎖されているかもしれませんが、教会は閉鎖されておらず、今後も決して閉鎖さ

れることはないでしょう。なぜならば教会とは、時間と空間に関係なく、一つに結ばれた私たちのことだからです。最近、神が遠ざかったようにみえるという声が聞こえてきます。しかし、私たちの神、自体内に三位一体の関係を持たれる神は、皆さんの吐く息と同じくらい近くにおられるのです。

今日は、三位一体について皆さんに説明したとは言えませんが、実は最初からそのつもりはありませんでした。カレン・アームストロングの言葉にもこうあります。「イエスは、後世の信徒たちが没頭するようになった三位一体や原罪や顕現について、多くの時間を割いて話すこと

はありませんでした。彼は出掛けては善を行い、慈悲を施しました」

要するに、彼は愛を実践したのです。他の人との関係において、また、それ自体が関係性である私たちの神との関係においてそうしたのです。それが私たちの最大の絆であり、私たちを苦しめるものに対する治療法であり、イエスの追隨者としての私たちへの第一の召命なのです。

兄弟姉妹の皆さん、私はこれらの言葉を三位神すなわち、創造し、贖い、支える三位が一つとなったお方の名により、そして先人の習いによ

れば、父と子と聖霊の名により皆さんにお話し
しました。アーメン